ポスター | 1-20 その他

ポスター

一般心臓病学①

座長:羽根田 紀幸 (どれみクリニック)

Thu. Jul 16, 2015 4:50 PM - 5:26 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-001～I-P-006

所属正式名称：羽根田紀幸(どれみクリニック　小児科)

[I-P-004]当院における純型肺動脈閉鎖の治療成績とカテーテル治療の役割

○佐々木 赳[1], 村上 洋介[1], 中村 香絵[1], 藤野 光洋[1], 川崎 有希[1], 江原 英治[1], 吉田 修一朗[2], 吉田 葉子[2], 鈴木 嗣敏[2], 石丸 和彦[3], 西垣 恭一[3] (1.大阪市立総合医療センター　小児循環器内科,　2.大阪市立総合医療センター　小児不整脈科,　3.大阪市立総合医療センター　小児心臓血管外科)

Keywords:純型肺動脈閉鎖, カテーテル治療, 類洞交通

背景：純型肺動脈閉鎖(PAIVS)は二心室修復(BVR)や Fontan型修復(UVR)に到達するまでに手術やカテーテルインターベンション(CI)を複数回要するものがある。目的：当院の PAIVSの治療成績を振り返り、 CIの役割を検討する。対象：2000年１月以降に初回心カテを実施した PAIVS15例。出生体重1612～3505g(中央値2543g)結果：(1)最終治療方針は BVR 6例、 UVR 9例。出生時 TVDは BVR 76～110%(中央値91)(TV z score -1.2～0.6、中央値-0.5)、 UVR 29%～66%(中央値44)(TV z score -6.6～-1.9、中央値-4.3)、初回心カテ時右室拡張末期容積(RVEDV)は BVR 52～133%(中央値94)、 UVR 12%～52%(中央値29)。 UVR全例で類洞交通(SC)がみられた。(2)BVR群の初回治療は経皮的肺動脈弁形成術(PTPV)2例(ワイヤ穿孔1,RFワイヤ穿孔1)、 Brock手術4例。 Brock後に PTPV追加2例。 Brock後に BT、 PTA、コイル塞栓術追加1例。死亡１例(Brock後)。術後経過観察期間0.5～14.8年（中央値6.5）。治療後の肺動脈弁圧較差4～35mmHg(中央値27)、逆流は軽度まで。(3)UVR群： Fontan到達7例、 PLE発症し take down 1例、 Fontan待機中 1例。 TVD 66%あり RV overhaul 後に UVRの方針となったもの1例。 Fontan到達までの手術回数3-7回、5例で CI施行 (PTA 4例に計8回、コイル塞栓術2例に計3回)。１例は BDG術後の難治性胸水貯留例で、肺動脈に対して計5回の PTAを施行し PAI 110から231まで改善し Fontanに到達した。死亡なし。結語： BVR群は手術、 CIの組み合わせにより経過良好であった。 RFワイヤ使用により初回治療の安全性がより向上すると思われた。 UVR群における肺動脈狭窄、肺動脈低形成には積極的な CIの介入が有用であった。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery